

渡辺英俊先生講演録

今を生きる

― 移住（外国人）労働者の人権 ―

◇講演会開催

日時 1999年10月2日

場所 目白聖公会

主催 日本聖公会東京教区

日韓在日プロジェクト

日韓交流プロジェクト

後援 東京教区人権委員会

東京教区カパティランププロジェクト

◇わたしたちに与えられた宣教の課題

常置委員長 司祭 前田 良彦

そこで、王は右の人たちに言う。
さあ、わたしの父に祝福された人たち、世のはじめから、用意されていた神の国を引きつぎなさい。
じつに、あなたたちは、わたしが飢えていたとき、食べていけるように、渴いていたとき、飲めるようにしてくれた。
わたしが外国からのよそ者でいたとき、仲間に入れてくれ、はだかのとき、つつみこんでくれた。
わたしが力おとろえていたとき見舞ってくれ、わたしが牢にいたときに会いにきてくれたからだ」

(マタイ二五・三四～三六)

(小さくされた人々のための福音、本田哲郎訳)

渡辺英俊牧師は横浜寿町で外国人出稼ぎ労働者の人権のためにそのすべての働きをささげておられます。
今回、東京教区の日韓在日プロジェクト、日韓交流プロジェクトが主催し、カパティランプロジェクト、人権委員会が後援した講演会「今を生きる」は渡辺英俊牧師のお働きと同時に、日本の教会が何を宣教の課題としなければならないか、ということが示されていると思われます。
特に東京教区の主催、後援したプロジェクトや委員会は「人権」をキーワードにした働きです。
冒頭にかかげた聖書の言葉の実践を見出すことが出来るでしょう。

本書で語られた渡辺英俊牧師の活動や、それを支える聖書のみ言葉に触れながら各教会の学びのテキストにしてくださいと願っております。

◇はじめに

少し基本的なことをお話ししたいと思って準備して参りましたが、ここにおいでの方にはすでにご存じのことでもあって重複してしまうので、できるだけその先に進みます。

もう一つそのことについて、ということで何かありましたら、遠慮なくストップかけて質問をしてくださればありがたいと思います。

今日は何点か資料を用意して背負ってきました。

一つは『片隅が天である』（新教出版社）という私なりの解放の神学ですが、今横浜で私がカラバオの会の活動を始めてから、実際に、こういう活動をしながらかような風に聖書を読んでいるという事をまとめたものです。

これを読んでいただくと、私がどういう考え方をしているかという事がある程度おわかりいただけるかと思います。

もう一つは「MI ネット」という機関誌ですが、ここにおいでの方の佐々木さん（カパティランププロジェクトメンバー）なんかにも助けていただきまして「移住労働者と連帯する全国ネット」というのを作っています。

今私はその事務局長を務めているのですが、全国で八〇余の団体が加盟しておりまして、このあいだ八月に終わりました国会では、入管法（出入国管理法及び難民認定法）の改定に反対して、相当激しいロビーイングをやりまして、初めて今回大きな成果がありまして、ほんのもうちょっとで法案をつぶせるというところまで追いつめたのです。

これはすごかったと思います。

私ども、ほんとに力のない団体ですけれども、政治の激動の中で、泡沫法案だったものを与野党対決法案にまで押し上げていって問題点を明らかにしてきたというのはすごかったです。

私個人としましても、初めて衆議院の法務委員会に参考人として呼ばれて、その呼ばれ方が、つまり推薦して下さったのが公明党と共産党なんですよ。

公明党と共産党の推薦で牧師が国会に呼ばれるというのもあり得ない組み合わせですね。

でもやっぱり歴史というのはそういうものなのかなと思いました。

初めて外国人移住労働者の問題が国会の中で、NGOの代表によって訴えがなされた。

私だけではなくもう一人は、森木さんという女性、この方は外国人と日本人が結婚した場合に、在留資格のない外国人が正規の在留資格を得ることが出来なかった時代が長くありまして、この方が戦って戦って、自分の夫の「在留特別許可」を取った。

法務大臣に特別許可を認めさせるということの第一号をやった人なんです。

そういう方と二人で行きまして、こちら側の主張を展開することができたわけです。

その時の参考人意見として述べたことが、今日持参した「MI ネット」二〇号に載っています。

(三〇〇円)

◇カラバオの会について

それともう一つ、この本は『仲間じゃないか、外国人労働者』（明石書店）。

カラバオの会が自分達の体験した事例と問題の分析として出したもので、これは、この「業界」では古典になっていて全国の運動の方向を作り出した本であったという風に思っております。

外国人労働者問題というのは新しい問題であります。八〇年代からのせいぜい十数年ですね。だからカラバオの会が全国で一番最初に出来て戦い始めたのは八七年で、一三年目になりますけれども、問題そのものが、だいたい一九八〇年代の半ば頃から顕在化して認識されてきたという新しい問題であるわけです。ただ私どもは新しい問題に目新しく飛びついたという事とは違ひまして、これにはこれの必然性がありますね。

実は今、私の働いている教会は「なか伝道所」という風になっておりますが、『片隅が天である』を書いたときにはまだ「中村橋伝道所」と言っておりました。

一三年前にこの伝道所を始めるときに、在日韓国・朝鮮人の人権の問題をやるつもりでした。それまでずっと横浜でやっておりましたから、それを続けるつもりで、在日の人たちの多い中村町という場所に小さな家を借りて開拓伝道を始めたわけです。

ところがたまたまフィリピンに一年いて帰ってきた所だったものですから、（実は向こうで聖公会の宣教師の遠藤雅己さんと親しくさせていただき、たいへんお世話になりました。帰ってきてこの伝道所を初めたとたん、すぐ近くの寿町にフィリピン人がたくさん来ちゃって大変な状態だという話を聞きました。

救援団体が今発足したところだということに帰ってきたものから、じゃあお手伝いしなきゃいけないかということでカラバオの会に参加しましたら、こちらの方が問題が緊急性が高すぎて、在日の問題の緊急性が低いわけではないんですけれども、救急車で飛び回るような。

本当に救急車に自分も乗ってみたことがあるんですね、血を吐いてかつぎ込まれて来た人を救急車で病院に押し込むという風に、そういう活動の仕方になっていきまして、それでそちらに巻き込まれていく。

結局、活動が寿の方に移って行ってしまったものですから、そして在日の問題の方がだんだんご無沙汰しまして、申し訳ないですけども、こちらの方で責任者にもさせられましたしということで、こちらに集中するようになっていきました。

たまたま機会がありまして、寿の中に教団の神奈川教区がもうけている寿地区センターというのがあって、それを立ち上げるのに、私もかつてお手伝いした事があるんですけども、その隣のアパートがぼっと空いちゃった。これは押さえておかないと将来的にどうしても必要だと言うんで、それじゃあ私達がそこへ移っちゃおうということになりました。

ペトロじゃないんですけども、年をとると帯を締められてあなたの行きたくないところへという、そんな感じですね、行きたいか行きたくないかにかかわらず現実に引っ張られてそこへ行った。そういう経過で、行った場所が「中区」で、元が「中村橋」で寿の「中」に入っちゃったから、そんな意味を含めてひらがなで「なか」というふうにしておこうということで「なか伝道所」になりました。

私は、在日の問題から、移住労働者問題に入ったという経過なのですが、その背後に実は私のルーツの問題がありまして、私の父親が植民地時代の朝鮮総督府の警察官で敗戦の時に光州にいたんですね、しかも特高警察であった。そういう、いわば植民地にした側の戦争責任のようなものをずっと引きずっている。これは日本社会の持っている問題を、私自身が自分の中に背負ってるわけがあります。

◇差別について

移住（外国人）労働者問題は新しい差別問題であるわけですが、日本社会にある他の差別と深いつながりがあると思います。

実は、私がフィリピンに1年行ったのは、日本社会の差別性というのにはほとほと嫌気がさしまして、教会もそれから脱出することが出来ないという状況の中で、1回外から日本を見直してみたいという思いで1986年にフィリピンに行ったという経過なんですけれども。

その日本社会の差別性というものの一番土台の所にあるのが、部落差別だと思います。

これは一番古いですし、根が深い、これが一番根底にあると思います。

そして、その上に積もっているのが、アイヌ人差別だと思います。

これは数が非常に少ないので目に付かないんですけども、私自身は、神学校を卒業して最初の任地が北海道岩見沢でありまして、北海道に10年いたんですけども、その間にアイヌ民族の問題にほとんど関心を持たずに通っちゃったという、信じられないような無関心が私の中にありました。

今見ますと、北海道を侵略してアイヌ民族を同化させていった。

部落差別の上に乗っかっているのがアイヌ差別だと思います。

その上に琉球の差別があります。

明治政府になるまでは独立国であった。

その前に島津藩によって侵略されて、属国にされていたという経過がありますけれども、形態だけは独立を保っていた。

独自の文化を持っている、もちろん人種的には日本列島に住んでいる人々と血縁的には同じですけども、国家としては別ですし、文化として別の文化、言葉も違った言葉を持っている。

そこを武力侵略して行って、占領して同化してしまう。

同化させた上で、その人達を被差別の最下層に組み込んで行って差別をしていくということです。

侵略・同化・差別というこの三段跳びをずっとやってきてるわけですね。

そのアイヌや琉球の上にやってきたことを更に重ねて、明治政府は台湾、朝鮮に持っていきました。

台湾で一旦成功して朝鮮に持っていったのですが、武力で占領して植民地に

してしまい、そして政治的に支配してしまう。

その人間の民族のアイデンティティを奪っていく、名前も日本の名前にしろ、言葉も日本の言葉にしろ、とアイデンティティを奪って行って日本人にさせてしまう。

しかし、日本人の下において、日本人より一等低いものとして差別していくという、この侵略・同化・差別という事を朝鮮半島でやったんですけれども、さらに、中国でもそれをやろうとして、大やけどをして敗戦ということになりました。

朝鮮半島を手放しましたけれども、日本に住んでいる在日朝鮮人については同じ事が起きています。

そのまま残っているわけです。

戦後の外国人政策の間違いの根本はここにあるわけです。

朝鮮侵略、植民地支配の責任をきちんと処理しないで、したがって、日本に住んでいる在日朝鮮人韓国人の処遇というものを、ちゃんとするという事に失敗したというか、全くちゃんとしようとしてこなかった。

この人達を日本人にさせてしまうか、嫌なら帰れと、同化か排除かというこの二者択一を迫って行って、外国人として、日本にいる朝鮮人に対して徹底的に嫌がらせをしていく。

嫌がらせがの最たるものが、指紋押捺であったわけですね。

これは激しい抵抗にあって、とうとうこのあいだの国会で、長い長い間、絶対に必要でこれはやめられないと言い続けてきたものを廃止したという経過があります。

戦後から、今日までの外国人政策の根本的な間違いは、朝鮮人の処遇にあったわけですね。

在日韓国・朝鮮人は外国人登録上は60万人弱ですけれども、いわゆる「帰化」して、日本国籍になっている人とか、日本人との結婚やその子供とか、何らかの形で、韓国・朝鮮人のアイデンティティを持っている人たちを含めて、大まかに100万人といわれるわけです。

こういう風に差別の層が重なっていて、この上に、新しい被差別層として移住外国人の層が積もりつつある。

これは全く新しい層であります。

私が、なぜこういう構造になっていると考えるようになったかという、移住外国人について、いったいこの人達は何でこんな差別を受けなきゃならないんだ、初めから在留資格も認められない、あなたはそこにいちゃいけない人間とずっと言われ続けながら、そこで仕事もし、そして税金も取られている生活がそこで起こってしまっている、この問題は何なんだ、どうして日本社会はこんなに排外的で、一人の人間がそこに生きているという厳粛な事

実に対してそれを尊重しようとししないのかという事を考えていってみると、その奥に奥に、ずっとこういう差別の重層があるということです。

断層を切ってみるように日本社会の断面を切ってみますと、日本社会の差別の一番新しい層が移住労働者差別、これは表層で一番目立つ層ですけれども、ずっと掘っていって見ると在日韓国・朝鮮人差別、アイヌ民族差別、そして一番基層に部落差別。

こういう差別断層、地層が横から見られるように積もっていった差別の層を見分けることが出来るわけでありませぬ。

こういう風に差別の層をつもらせていったのが、先ほど言いましたように侵略・同化・差別という歴史の堆積であるわけだ。

私はそういう目でもって、部落差別をもう一回見直してみました。部落差別はカースト差別の一種ですけれども、このカースト差別というのは、どうして起こってきたのだろうかということですね。これは専門家の意見を聞かなければなりませんが、私はインドに行ってみて、インドのカースト差別と日本の部落差別の類似ってこれは何なんだということをおもいました。

フィリピンにはこういう差別はないんです。だからアジア共通の差別とは言えないんです。フィリピンにはこれがない。地層をどんなに深く掘ってもそういうものはない。しかし日本とインド、朝鮮半島もそうなんです。掘っていくとこれが見つかるんです。何なんだということですね。

今、私はこういう風に理解しております。武力に勝るどう猛な少数の侵略者が侵入して行って、大多数の人々を支配下に治める。少数侵略者が大多数の被侵略民を支配していく際に、自分たちは支配する資格があるんだということをみんなに信じさせるために自分たちは人種的に「貴種」なんだという風に言う。これはインドに侵略したアーリヤ人が、自分たちをバラモンという風に言って自分たちは貴種なんだと言った。あなた方は人種的に低いんだから私達に従えと言っている。しかしこういう構造を安定させるためには、「貴」の対極に「賤」がないと安定しませんから、「貴人」がいるとすれば対極に「賤民」がいるという風にアウトカーストを作っていくということですね。つまり少数侵略者が多数被侵略民を支配していくときに、自分たちを「貴種」として位置付けている、そして社会を階層的に作っていく時に一番大事なのは、反対側に「賤民」層というアウトカーストを作っていくことで

す。

それはおそらくインドのカースト差別の根元だろう。

それがヒンズー教の中にずっと宗教的に体系化されて強力な文化にされていて、それが今も動かないということですね。

それと比べてみますと、日本の部落差別というのはまさに同じ事が起きている。

たぶんアジア大陸の一角から始まった一部の侵略者達が「天子降臨」、つまり天の神様の子供が地に降りてくるという、私達は天孫降臨というのを教わったのですが、あれは原型は「天子降臨」だろうと言われます。

天の神様の子供が地上に降りてきてそこに国を作るというのは、どこか外から侵略者が来てそこを侵略するということなんですね。

見事に侵略性を表している神話だと思うんですけども、そういう人たちが、その天子降臨神話と、それから祓い清め思想、「浄不浄」の思想を持ってきて、「貴種」の一番上に「天皇」という存在を疎外する。

その反対に「賤民層」というものが疎外されていった。

ここから階級制度ができて、賤民層が、その後色々形が変わってきますけれども、江戸時代の徳川幕府の元で「部落」というものに固定されて今日の部落差別の基になった。

これは一番古い層ですから、時代がだいぶ違うんですけども、やはり侵略・同化・差別が根元のところにあるんじゃないか。

その上に、近代になって他の国々、周辺の人々と接触を始めたときにこの考え方でどんどん侵略を進めていった。

しかし、今度はこちらが多数者だったから相手側を全部こちらにとり込んでしまっ、その人間を日本人にさせて、言葉も、アイデンティティも、文化も全部奪った上で、しかし被差別者とするというやり方をしてきたということです。

こういう差別の根本構造があって、それに縦軸に貫いている差別がいくつかあると思うんですが、一番代表的なものとして、女性差別と障害者差別が、今一番目につくものとして縦軸に貫いているだろう。

どの層を取ってみても女性は差別されている。

障害者も差別されている。

場合によっては、障害者をどの被差別層の人達よりも、もっと差別するという形でここに縦軸にする。

こんな風に日本社会の差別構造、差別性という物を構造としてとらえ直してみますと、移住外国人の差別というものが、こういう土台の上に立って新しい層として積み重なりつつあるものだ。

だからこの問題だけで解決するのではなくて、この日本社会の差別性という

ものが根本的に変わっていかないと実はこの差別はなくなる。

しかし逆に言うと、この最先端で今起きていることですから、見ればわかる、こんな酷いこともあるよと、今日もちょっとその例をお話しますし、佐々木さんもその例をたくさんお持ちだと思います。相談という形でどんどん入ってきますから、一番酷い状態で、これいくら何でも酷いんじゃないのという形で顕在化します。他の差別の方は陰湿に隠されていますから、差別なんかしてないよという形で差別されているということがありますが、こちらはかくすどころか、あからさまに大っぴらに、一番酷い大っぴらはですね、日本では警察が先頭に立って外国人の差別宣伝をやっています。人種差別撤廃条約で、一回外からたたかないと駄目かなという風に思っているんですけども、そういうことが最先端で行われているということですね。

実は運動もこういう事をしっかりと、認識してきております。このあいだ九月初めに、長野で開かれた部落解放同盟の全国研修に、一万三千人集まったというのは凄いですね。やっぱり向こうは運動として凄い。そういう研究会のひとつの分科会に、レポーターとして呼んでいただきました行って来ました。まだちゃんと確立した分科会じゃなくて、分科会になる準備みたいな分科会なんですけれども、でも、そういう形でこの部落解放運動の中に移住労働者問題がはっきりと位置づけられてきているということですね。それはとても大事なことだと思っています。

そんなわけで、日本社会の差別性というのは、あれこれの差別があちこちにパラパラあるのではなくて、実は一つの同じ構造でつながっている、だから、一つの問題と取り組むということは他と必ずつながってくるものだという事を理解しながら、そういう視野で私は当面、この事に重点を置いていく、そんな風にして今私は取り組んでいるわけでありませう。

質問

部落、アイヌ、琉球そして台湾、朝鮮侵略をして、同化をして、差別をしていくという事が一つの国交上のシステムの態度だととらえた場合に、この移住労働者、移住外国人に関してこの侵略の概念というのはどういう風にお考えですか。

はい、ありがとうございます。それを言い落としました。これはですね、今日お話しする中で出てくるとは思いますがちょっと今言っておきます。朝鮮を植民地にした侵略というのは武力を使って政治的に統合してしまう、併合してしまうという、ものすごいハードな侵略主義、植民地主義でありました。近代のヨーロッパ諸国がやった植民地というのはみんなそれですね。日本もその尻馬にのかって一時やりましたが、結局、周りから袋叩きにあったという経過です。

ところが、戦後の植民地主義というのは、新植民地主義といわれるものだと思います。つまりお金の力で出て行って支配していくという、資本が進出して行って、その地域の経済を支配していく。経済を支配するのですから、その時に必ず政治と結びついていくわけで、地元の政府というのは、そこの人達が選挙している形を取るけれども、実質的には資本本国が決めている。例えばフィリピンの大統領が誰になるかというあたりは、だいたいワシントンのあたりで決まっていく。

フィリピンは、アキノ政権が成立した直後、マルコスさんが追放されるんですね。私は、ちょうどインドネシアの今と同じ様なことが、フィリピンに起こったあの時期に、直後にフィリピンに行ったのですが、マルコスさんがあんまり酷いので見切りをつけたのがアメリカで、アメリカがマルコスさんに引導を渡してヘリコプターを出して、ハワイに引き取ってやって、散々使ってきた

のだから見捨てるわけにはいかない。それを引き取ってあげて、後はアキノさん。

ちょうどアキノさんが大統領になった最初の一年間、私はフィリピンにいたわけですが、クーデターが起こるたびに右と左を切っていくという形を取るんです。

マルコス政権を倒すのに、いちばん力のあった革新派の閣僚がどんどん切られていく。

右も切られるけれども、主に左が切られる。

結局クーデターを鎮圧するたびに誰が力を持つかというと、ラモスさんです。

ですからあの一年で、アメリカは次はラモスさんを立てる筋書きを書いているな、ということが読めましたね。

ラモスさんはアメリカのウエストポイントの士官学校の出身だと聞きました。

そうだとすると中身はアメリカの士官だということ。

そういう意味で、次はラモスさんというシナリオだなという風に思いました。

多少曲折ありましたが結局そうになりましたよね。

つまり第三世界の政府というのはほとんどがアメリカ系の（日本もそれに含まれるんですけれども）資本によって養われている政府です。

解放の神学と関係あるんですけれども、南米でそういうあり方に対して、植民地から独立して、自分たちの社会を作りたいということで、独立していきますと、それに対して独裁政権、軍事政権。

軍事クーデターを起こして、その軍事クーデターを起こす軍備と金は何処から出ているかというと、アメリカから出ているという形で押し込まれて行くわけです。

ニカラグアのように、革命政権が出来上がりますと、今度はそれに対してコントラの勢力が起こってきて、アメリカのお金でもって、アメリカで訓練された人達が入ってきて、内戦が続いて、ついにどちらも疲れ果てて政府がつぶれていって。

つまりそういうやり方で、新植民地主義というのは直接自分の所の軍隊を送りません。

むしろ地元の政権を金で買う、そして資本が、資源も何もかも全部持ってきてしまうということです。

そういう新植民地主義の支配ですから、これは形を変えた植民地支配なんです。

そういう意味で侵略・同化・差別というのとほとんど変わっていない、やり方がソフトになっているところを一度むいてみるとハッキリしてくるとい

う事であります。

◇日本社会の「今」

こういう図を作ってみました。

日本列島の上にコンテナが10個積んであると思って下さい。

この色で塗ってあるコンテナ10個、この10個が一年間に日本に持ち込まれる物資の総量です。

その1個のコンテナが7500万トン入りですね。これが10個一年間に日本に入ってくる。

そのうち日本から出ていくのは、1、3個分、10個入って1、3個しか出ていかない。あとの8、7個というのは日本の中に残っちゃうんですね。どう考えたって日本列島ゴミ問題で困るといえるのは当たり前ですね、これだけ持ち込んじゃうんですから。

しかしゴミ問題以前にですね、これだけ品物が入って、いろんな物が来ちゃったら、ただで持ってくるわけではないんですから、お金を払って持ってくるわけなんですから、これであつたらお金がなくなっちゃうのが当たり前なんです。こちらがスッカラカンにお金がなくなっちゃうはずなんです。けどもこの図の資料をとった九五年は、この貿易黒字が12～3兆円になっているわけです。

つまりこれだけ物が入ってきてしまっているのに、お金もガボガボこっちに貯まっちゃうのは、いったい何なんだろうということです。これは素人だからこういう事が言えるんです。経済学者はもっとすっきりしているんですよ。説明聞きますとね。それは付加価値の低い第一次産品を輸入して、付加価値の高い、第二次、三次産品を輸出するんだから、つまり米が200トン入ってくると200トンだけど、車が一台出ていくと1トンもないわけですよ。

米200トンと車一台、変動があるかも知れないですけども、大まかに言っただけの値段になるそうです。ですからそれは当たり前なんですよ、こっちの方がそれだけの高い実力を持っているんだからと、こういう風におっしゃるんです。

でも私は、ここのところでは素人の感覚をとてとても大事にしたいと思いません。

どう考えても、こんなに物が入って来ちゃって置いてこれしか出ていかないのに、こっちにお金が残っちゃうというのは、どこかがおかしいのではないかと。

それはこういう事だと思いますね。

私はフィリピンの山の中を一生懸命歩きました。

神学校の教室に行っている時間よりも外を歩いた時間の方が多かったと思います。

すると2〜3人で抱えるような、大きな、本当に天を突くようなラワンの大木があるわけですよ。

これだけの大きな大木になるまでに、何百年かにわたってこの大木に注いだ南国の太陽のエネルギー、雨がずっと降って、そうして濡らしたという雨の力、そして5センチ積もるのに500年かかるというそのまわりの腐葉土、木の葉が落ちて積もっていく、そういう「時間」というものをいくらに換算するか。値段が付かないです。

このラワンの木を機械でビューッと切り、バサーッと倒して、パッパッパッと刻んで、ドーッと運び出して、そうして日本に持ってきて、板にしてコンパネルにして、バーッと使ってしまう、あるいは紙にして使ってしまう。その時の、一本の木の値段というのは、伐採権と、道路を造る費用と、機械を使う費用と、あとは人間、ものすごい安い賃金で使う地元の人間の労働と、あと船で運ぶ運賃。

この木の上に注いだ太陽の恵みなんていうのは、全然値段に入っていないわけですよ。

力関係で決まるわけですよ。

あのマルコス政権が、アメリカの力に支配されたために、アメリカの言うとおりになる支配で地主達も、そのまわりに集まっていた方が得だから、そういうことで名目上、自分が地主になっている山の木を切る伐採権というのは安くたって、ふところには、ガブガブいくらだって贅沢ができるだけのお金が入ってくるわけですから、バサーッと木を切ってしまう。あとが砂漠になったって裸になったって、そんな事は知らないわけですよ、お金が入っちゃえば。あと、この貯まったお金は別の所へ、今度は石油に投資しようとかね、今度は銅の方へ投資しようとかすればいい。

つまりそういう自然資源というのは本来値段の付かないもので、それに値段を付けてしまうというのは、力関係によります。

だから、これだけ持ってきても、こっちがもうかっちゃう事であるわけですよ。

米200トンがあると、相当長い間食いつなげますけれども、ガソリンがない車なんか、いくら置いておいたって寝床にもなりませんよ。

そういう物の価値のはかり方というのが違うと思うんですよ。

ですからどう見てもこれはやはり不条理、不正義がここにあります。

結果的に何が起こるかと言うと、あの資源の豊かなフィリピンで人々が餓え

る。

魚が涌くほど獲れた海で魚が一匹も獲れなくなっちゃう、何故かといったら、日本の漁業が行ってトロールで、村井吉敬さんの言葉を借りれば、海の底がアスファルト道路みたいにツルツルになっちゃうやり方で、そこで魚が一匹も獲れない。

来年はその沖の方でやって、その翌年はだんだん沖に行く。

この海で小さな船で漁をする漁民は、最初はこの辺でいくらでも獲れたのに一匹もない。

トロールやった先、先へ先へと出ていって、そして小さな船で沖まで無理して出るものだから漁民の遭難が多くなる。

そういう話を向こうで聞いてきたんですよ。

横浜に帰ってきてカラバオの会で活動を始めた、その年、1987年の7月ですよ。

6月から始めて7月ですよ。

フィリピン大使館から、実はルソン島の漁民が遭難して36時間漂流して奇跡的に船に見つかり、救い出されて、その船が日本へ来る船だったものだから日本へ来てしまった。

送り出すまで10日ほど横浜にいななければならないので、カラバオの会でちょっと面倒を見てくれないかということで、2人の漁民を10日間お世話したんですけども、北部ルソン島沖の南シナ海の方ですけども、10マイル沖に漁に出たということです。

台風が来ているのを知らなかった。

それで台風にあって船がバラバラになってしまって竹のステイに掴まって36時間漂流した。

これは決して話としてではなくて、現実、そういう事が起こっている。

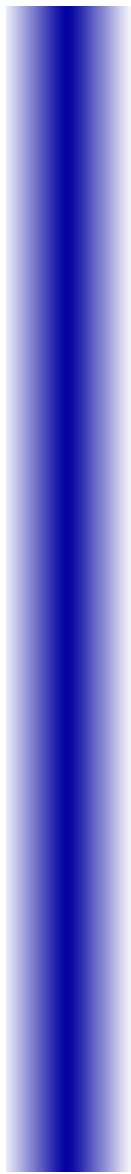
そうやって獲れた魚が80%日本に来ちゃう。獲ろうにも海に魚がいなくなってしまう。

海に魚がいなくなると、また日本の援助で今度は陸で魚を獲る。

それは海岸沿いの所を、砂浜を掘って養魚池を作るわけですね。

そうすると、地主にとってはタンボなんか作っている、あるいはココヤシなんか生やしておくよりはずっと収益が高いわけです。

わずかの労力で、抗生物質をぶち込んで、飼料をバンバンぶち込んで、いかにして早く有効な飼料の使い方、つまり、早く魚を大きくするかという研究所を作るのに、日本のJICA（日本国際協力事業団）のお金が行っているわけです。



◇移住労働の実態

結局、向こうの富をこっちに持って来てしまう。こうして資本本国に富が集積される。

日本やアメリカやヨーロッパにどんどんお金が貯まっていく。

向こうは物が持って行かれてしまって仕事がない、食べる物もないという状態が起こるわけです。

そういう結果として、日本に人が来ざるを得なくなる。日本に来れば男性は三K労働、女性は風俗産業という形で、日本社会の最下層に組み込まれていくということなのです。

これは私達が理屈の話としてではなくて、実感として、つまり横浜の寿町という寄せ場、山谷のような、日本社会でいえば最下層の場所ですけれども、それ以上落ちたら、あとは野宿して餓死・凍死しかないという、そういう最下層の場に、ドッとフィリピン人が来ちゃう。

何故かと言ったら、日本に来たとたんに、ストーンと寿に来ちゃう地下水脈ルートがあったということですね。

一人一人事情が違うんですけども、まず来はじめた当時一二年前には、ブローカーかなんかにお金を払って、偽のパスポートもらって、成田に迎えに来て、そして仕事場にぶち込まれるわけですけども、ぶち込まれたところがもう宿舎なんてものではない。

当時、私達の所に来た人達の話では、宿舎みたいな所はあったことはあったんですけども、食べ物が何も無い。鳥を食べるといったら、毎日、朝晩、三度三度、鳥肉ばかり食わされていた。

鳥をドッと持ってきて、これを食ってろと言って置かれたとか、たまりかねて逃げてきた。

それから工場の隅に棺桶みたいな箱があって、その中に寝かされたとか、庭の隅に廃車があって、その中に寝かされたとか、ともかく人間の待遇じゃないんですね。

そういう事で、低賃金で働かされたという経過があります。

たまらないといって逃げ出すと、もうあとは何処も行く所がないのですね。

何処でも受け入れられない、結局寿に来れば、ともかく、当時のお金で一五〇〇円位払えば一晩泊まる場所もあるということで、寿に来てしまうという経過で、寿にフィリピン人がドッと来てしまうというわけがあります。

ですから本当に理屈ではなくて事実、私なんか横浜に十何年住んでいてもほとんど足踏み入れたことのない様な、そういう場所ですね。たまたま踏み入れないわけではなくて、踏み入れないようにバリアーができています。

今、寿で青年ゼミというのを開きますけれども、女子の大学生達がたくさん参加しているんですけども、彼女たちが、寿の周辺で道が分からないということで聞きますと、薬屋さんであろうと、交番であろうと、道を歩く人であろうと、必ず親切に、あんな所娘さんが一人で行くところじゃないよと、行かない方がいいよと、親切にアドバイスされて、つまり、まわりから見えないうバリアーで囲い込まれた、そういう場所であるわけですね。

そこにですね、フィリピン人が日本に来ると茨城県に来たはずなのが、次の日にはそこに来ちゃうという、ある地下の通路がつながっているんだということですね。そういう形で日本社会そのものの隠れた問題が、顕在化してきているというわけです。

◇オーバーステイ

日本にいる外国人、日本で暮らしている外国人をですね、おおざっぱに178万人と去年末の現在で計算しましたが、これは単純に外国人登録をしている人の数にオーバーステイになっている、超過在留をしている人の数を足したものです。

その中身を見ていきますと、そのうちの59万人、だんだんこれは減っているんですが、いわゆる「オールドカマー」と言われる在日韓国・朝鮮人、中国人。

この部分ですね、この一番新しい層の前の部分ですね。

この人達は歴史的な経過から言うと、とうの昔に日本国籍が取れてなくちゃいけない。

つまり日本の国籍法が血統主義ではなくて、あるいは同じ血統主義でも、もうちょっと開かれたものであれば、もう二代目三代目位になってまだ外国人ということはあり得ません。

ハラボジ、ハルモニの代に日本に来ているのに日本国籍を取るには、「帰化」という屈辱的な制度で、高いバリエーションをクリアしなければならない。

そんなんなら別に日本人になりたくないや、というのはあたりまえです。

自尊心がありますから。そういうことで外国人のままです。

日本の国籍制度が「市民権」という考え方を持たない閉鎖的なものであるために、親子代々、末代までも外国人のままに置かれるという、そういう部分です。この部分は歴史的にちょっと事情が違うんですね。これに対して、それ以外の「ニューカマー」と言われる人達というのは、だいたい80年代からドッと来はじめているんですね。その切れ目が非常にはっきりあるわけですよ。

ですから、「オールドカマー」「ニューカマー」というような呼び方で同じ平面で考えるわけに行かないところがあるわけです。

この人々の数が約119万人ということになる。

この辺の数字はあんまり細かく言ってもしょうがない、というのは、これは外国人登録者と、オーバーステイという風に、固まった数字になっている人達だけ数えていますから。

でも日本に来てすでに働いているけど、外国人登録もしてないし、オーバーステイにもなっていないという人達がまだいるわけですから、この上に、相当上積みされなければならないんですけれども、まあ大まかに、定住傾向が強くなっている人達というのは、このなかにいると思います。

ここにありますがこの図は私が作ったものです。
これは毎年「在留外国人統計」というものを入管局が出していて、それを元にしています。

入管法の在留資格が、在日韓国・朝鮮人の特別永住というものを含めて28種類あるんですが、その28種類の在留資格で分けてみても実態はなんにも分からない。

というのは、その在留資格が決して実情を反映してないんですね。

つまりそんな28種類もいらなくて、「労働」という在留資格があれば5~6種類で終わっちゃうわけです。その「労働」というのを出したくないばかりに、例外だけを拾って在留資格にしているので、こういう風に28種類にもなっちゃったということなんです。

それでむしろ在留の実態に従って分類し直してみると、ここにあるような数字がでてくるわけです。

一番大きなグループがオーバーステイのグループです。

働きに来るんですけども、日本では、労働という在留資格がありませんから、主として観光ですが、「短期滞在」というビザで入って、普通は3ヶ月、延ばしても半年で帰らなきゃいけないのを、そのままずっといてしまうという人達がオーバーステイですね。

ここで皆さんに是非辞書を書き換えていただきたい。

入管用語ではこの人達は「不法残留」というんですよ。「不法」に残留しているというのはものすごく悪い人という印象ですね。

国会議員と話している時に「不法だからねえ、やっぱりそんなんじゃないよ良くないんじゃないか。」と、よく言われます。そこで「不法残留」と言わないでオーバーステイと言いかえています。

確かに入管法上の在留期限を過ぎているのは事実ですが、「不法」というと凄く悪いことをしているようだけど、たまたま、受け皿がなかったからこぼれただけで、悪いことは何もしていません。

労働法上では、ちゃんと保護されるような、ちゃんとした活動をして給料を取っているわけですよ。

「オーバーステイ」というとホームステイとあんまり変わらない印象になります。

あんまり使っているとそのうちに差別性を持つてくるかも知れませんが、今のところはまだ、ホームステイとあんまり変わらないニュートラルな言葉です。

この人達は、法律からはみ出た形で働いているわけで、この人達の出会うトラブルというのはすごく大きいわけです。

ただ93年というのはひとつの天下分け目の年で、この年、入管と警察が

全国でもって一斉に手入れをしてオーバーステイの外国人をたたきだそうとしました。

よく知られている代々木公園にイラン人が作り出した非常に面白いエスニックな空間、あれはこれからの日本の将来にとって本当に貴重な実験だったと思いますよ。

自然発生的にイラン人がそこに集まって来て、日曜日になるとイラン人の町がそこにできたと。

そこへ今度は日本人の若者達が面白がって入って行って、そこで仲良くなっちゃって、勿論労働相談を始めたグループもありましたけれども、ホコテンなんか歩いている、いわゆる原宿あたりをのし歩いている日本の若者達が、そこへ入って行って、そこで交流ができていっちゃう。

非常に面白い空間になりかけたのですが、日本人の若者達が入っていったとたんに警察がそこへ入って、そこを弾圧してなくしちゃいました。

ものすごく大事な宝物を踏みつぶしたと思いますけれども、そういう弾圧が始まったのが九三年です。

それから少しずつ減りますが、しかし増えるときのように劇的には減りません。

やはりなだらかに、やや減り気味ですけれども、みんなで頑張って何とか食いつないでいる、という状態で、去年末現在が20万1000人ということですね。

◇労働トラブル

この人達は様々なトラブルがありますけれども、一番相談にたくさん来るのは労働トラブルです。

賃金が払ってもらえない、それから労災にあったけれども、補償が受けられない、それから突然首になっちゃったということですよね。働いて賃金が払ってもらえないということ、逆から言えば働かせておいて、賃金を払わないというのはこれは犯罪ですよ。どう考えたって悪質な犯罪ですよ。

ところがやられた被害者の側がですね、このオーバーステイの外国人でありますと、社長に向かって「社長、これ約束が違うよ。」という風に苦情を言うと、社長が「それじゃあ警察呼ぼうか。」と言う。

ですから加害者が警察を呼ぶんです。警察が来ると被害者が捕まるんです。こんな馬鹿なことはないと思いますね。でも何故そういう事が起こるかという、賃金未払いというのは労働基準法、労働法に関わるものです。

労働法関係は警察の管轄外で、これに口を出したら警察は違法です。

だから警察を呼んでも、賃金未払いは警察には面倒を見てもらえません。

ところが入管法違反は警察の管轄ですから、警察を呼べば警察が面倒を見てくれるわけです。

で外国人の方が捕まってしまう。そうなっちゃ困るから仕方がないから黙る、こういう事ですね。

加害者が警察を呼んで被害者が捕まるという風な、そういうおかしい状態というのはあってはならないことです。それで相談に来まして私達が相談に乗っていく。

労働法規というのは、労働基準法第三条で「使用者は、労働者の国籍、信条又は社会的身分を理由として賃金その他の労働条件について差別的扱いをしてはならない。

」と規定している。国籍で労働者を差別してはならない、とここにはっきり書いてあるんですよ。

これがあるおかげで今まで助かってきたんですよ。我々の救援が成り立ってきたんですよ。

当初はこの労働基準法があるにもかかわらず、入管法には通報義務というのがあるんです。

ですから労基署に「賃金未払いがありました。」という風に持っていく。

そうすると労基署は労働基準法上差別ができませんから、それで事情を聞いて

て雇い主に「お金を払え。」とこういう風に言う。場合によっては取り戻してくれることもあるんです。

ところが同時にこの労働基準監督官は公務員ですから、いろんな事を調べてオーバーステイがわかると入管に通報しなきゃならないということになるわけです。

これを杓子定規に解釈しますと賃金未払いを持っていったら、こちらが入管に通報されて捕まっちゃうわけです。ですから労基署が使えなかった。最初の三年間使えなかったんですよ。

いちばん悩んだのはですね、もう話にもならないんですけれども、労災で人さし指をけがする、で、第1関節の頭半分切った。この半分を超えるか超えないかでもって、労基署に持っていか持っていかないかを、判断しなきゃならなかった時期があったんです。

それはどういう事かという、半分以下だとですね、これ指の機能が失われませんか。

ですから障害等級が一三等級位ですよ、指の先がなくなっても。

そうすると補償金がですね、90日分ですから、当時は70万円位なんです。

70万円もらって、通報されちゃったんじゃないあ往復の飛行機賃と、それから借金して偽パスポートを買った、そういうものは元が取れないんです。だから、泣き寝入りして働くほかしょうがない。

まあ指一本の頭ぐらい何とか我慢して働くほかしょうがない。

これに対して第一関節半分過ぎますと、今度は指が曲がらなくなる。用を廃したということになります。等級が二級上がって11等級という形になります。

そうしますとですね、これは補償金が200日分ですから160万円位になる。

1600万円なら、まあ借金を返していくらか持って帰れるかということ、通報覚悟で労基署へ行こうかという風になるという、誠にもって、非人道的な判断をしなきゃならなかった。

しかも雇い主に住んでる場所が知られている場合、雇い主が労災にしたくないのを、こちらが労災にしますと、この仕返しでもってチクられます。だから、安全のために住居を他に移しておいてから、労災を申請するという風なやり方をしなきゃならなかったとか、そういう事がたくさんあったんです。

これはおかしいおかしいということ、私達言い続けまして、そして、はっきりと1989年の秋に通達が出まして、通報が行われなくなりました。私達も持っていくときに「今度持っていくケースはオーバーステイなんですけれども、お宅は通報しますか。」という風に監督官に聞くんです。

監督官が「いいえ。私は通報しませんけれども、県の労基局に報告は出しま

す。」県の労基局に連絡して「お宅は通報するんですか。」という「いいや、うちは通報しません。ただし報告は本省に出します。」と言うんです。で私たちは「ああ、それで結構です。」とこういう風に言うんです。何故結構かという、だいたい現場からパーツと通報が行ったらこれはアウトですが、普通、通報は県の労基局がまとめてから地方入管局に行くわけですから、県が通報しなければ通報は行かないのです。それからは軽い怪我でも労災補償が要求できるようになりました。小さなことですが当事者にとっては大きな変化でした。

ただバブルの崩壊で人手がいらなくなったらですね、悪質な雇い主は首にするかわりにチクっちゃうらしい。突然、入管が工場にやってきて全部連れて行っちゃうんですね。それで雇い主も本当は罰金になるはずなんですけれども、まあ罰金の方が軽くて済んじゃう場合もあるものですから、いなくなった労働力をむしろ入管に送っちゃって、そうして、いなくさせるという風なことが起こるということです。まあそういう労働者としての権利が守られないということが非常に多い。

それからもう一つ深刻な問題は、保険がないということです。これも厚生省がどういうわけか、えらく法務行政にたいして義理堅くてですね、オーバーステイの人は社会保険にも入れない、国民健康保険にも入れない、生活保護も出しませんという事ですね。病気になって入院しちゃったら、お金が払えないんですよ。普段ちょっと風邪をひいただけでも、ものすごいお金がかかるわけですから、それで、ついつい我慢して悪くしちゃうという状態ですね。

◇日系人問題

日系人の問題は、実はオーバーステイと関係がありましてですね、80年代の終わり頃にオーバーステイがどんどん増えていくという傾向になりました。

八九年に法務省はそれを防ごうということで、入管法を厳しくしました。

「不法就労助長罪」という新しい罪名ができて、不法就労の人を雇った日本人も罰せられるという、そういう項目ができました。それから、翌年にかけてちょっと横ばいになったんですね。

増加がちょっと止まったんです。で、法務省は抑止効果が出た、法律を厳しくしたのが効果があったという風に言ったのですが、私達はそれに対して冗談でしょう、原因は違うんじゃないですか、という風に言っていたんですね。

それは何故かという、実は、それと相前後して法務省はもう一つ手を打っているんですね。

それは違法の外国人が増えるのが困る。でもバブルの最盛期ですから、外国から労働力に来てもらわなくては行けないと。来てもらうについては、合法の人を入れたい。

でもドッと来られても困るから、そこで、南米に移民した日本人の子孫、つまり日系人。

この人達ならば日本人だからという、これこそが血統主義の血の信仰ですよ。

もともと日本人だから日本社会に連れてきても、日本社会の血の純潔性が乱れることはないだろう、という風に考えて日系人を入れることにした。

一世の子供はまだ日本国籍を保持していますからね、二重国籍を持っているわけですけども。

その子供つまり一世の孫までは「日本人の配偶者等」という、「等」がつくんです。この一字がすごく意味を持つんですけど、要するに「子」ですね。その次の世代になると、今度は日本国籍者じゃなくなっちゃいますから、それでその人達は日本人の子孫であることが証明されたら「定住者」というビザで入れる。だから、南米系の「配偶者等」と「定住者」というのはほとんどが日系人であるわけです。

この時にですね、約20万人の日系人が導入されました。

しかも日本人が日本に帰ってくるだけだから、何も面倒見なくて良いと考え

て、ビザを発給することにした。で1、2年の間に約20万人ドバーッと来ました。

ところがですね、当時私達は言ってたんですね。高野豆腐を水につけると違うよと。

水につければもとの豆腐にもどるというわけじゃないでしょと。もう向こうに住んで二世三世の世代になれば向こうの文化なじんでいる。雨の別れの涙の旅という演歌の世界の人間、湿っぽい世界の人間と、サンバでもってバーッと踊っちゃう世界の人と全然メンタリテイが違う。

20万人からの人を短期間に他文化間ワープをさせるには、ちゃんと政府同士が相談して、そして向こうの募集体制と準備体制と、こちらに来てその職業斡旋と受け入れ体制をちゃんと手を打ってからやらないと大変なことになるよと言ってたんですけども、それを何にもやらずに野放しにした。

野放しにするとどういう人達が親切に面倒を見てくれるかということ、もちろんボの字のつく人達が多いんですけども、まあこの場合、合法ですから必ずしもボの字でなくても良いんです。私のような普通の人間で。

たとえば、私がひと儲けしてやろうと考えてですね、「渡辺工業」という会社をおっ立てたとします。

机一つ電話一本で、そしてラテンアメリカに行っているいい加減な広告を出して給料をうんとあげるからと言ったら、人がドーッと集まって、その人達を連れてきて安いアパートに住ませておいて、で、名だたる一流企業の下請け、孫請けのA製作所ならA製作所という所に三〇人くらいの人を送り込んでいくのですね。ほかにも何か所かこれをやる。派遣業です。これは違法です。それがばれないようにするためには私はA製作所と下請け契約を結ぶわけです。

A製作所の何々工場のこのラインを渡辺工業が請け負います。そこに労働者が行くわけですね。

しかし工場長一人だけが日本人、後はみんな外国人。渡辺工業の社長の私はどうするかということと一緒に行きません。だって私は工場のことなんにも分からないんですから。

私は何をやっているかということ昼間はパチンコに行って夜はフィリピンパブで飲んでいる。

仮に100人送り込んだとするとピンハネが1日3千円ということはない。もっと多いんですけども最小限3千円と見積もったって1日30万円ですか。

パチンコしていて1日30万円入ってくるわけですよ。つまりそういう荒稼ぎをしているわけです。

それでバブルの崩壊、人手がいらなくなりました。で元請け大企業が生産調整ということになると、下請けに注文が止まっていく。A製作所も下請けの注文がなくなりましたから、ある日私に突然電話がかかってきて「渡辺さ

ん、あなたとこの人要らなくなった。来月から要らない。」「あっそうですか」と。

いささかも慌てず社長はその日のうちにみんなに「来月から仕事ないよ」と。「これから二週間のうちにアパート返すから、あなた達は何処へでも行きなさい。」と言いわたして、私はたんまり貯めたお金を持ってフィリピンかどこかへ遊びに行つてしばらくもぐつてるわけですよ。放り出された人達は未払い賃金があるかも知れない。あるいはですね、あと次の就職を見つけなきゃならないかも知れない。

けどもう社長は逃げちゃってるからどこにも文句は言えない。

だいたい93年頃ですね、そういう事で特にペルーの人達が放り出されて路頭に迷う状況になったわけです。

そしてたまたま九州の福岡のカトリック教会の信徒の方が、見るに見かねて、とにかくお金を1万2万あげて助けるというのは、いわゆる物乞いに物をやるようなそういうやり方じゃだめだと。

やっぱり人間なんだから働きたいんだから仕事の斡旋してあげる方がいいと。

ともかくできるだけ仕事の世話してあげる。100人か200人ぐらいの保証人になっちゃった。

保証人になった後万一事故があった時に自分じゃ負いきれないからということでいくら保証金を積んでもらう。その保証金の扱いを間違えたんですね。

ちゃんとした別口座に入れておけばまだ良かったのに、事務をやっている暇がなくて、たまたまあった自分の銀行口座に振り込んでもらったんで懐に入れたという風に見られちゃったわけですね。

で、まあそういう事で支援団体逮捕第一号にカトリックの信者の方がなりました。

その方が捕まったときに、私は「ごめんなさいね、私が逮捕一号になるつもりでカラバオの会の代表を引き受けたわけだけれども、でも私の方にこないであなたの方に行っちゃいましたね。」という風に言ったんですけれども。それは私達は初めから運動としてやっていますから、その点十分注意しながら、ひっかけられることをできるだけ少なくするように気をつけて来ましたけれども、その方は一人で突っ込んじゃったんですね。見るに見かねて。

これはやむを得ないことですけれども、事務のやり方に手抜かりがあったことは否めない。

そういう事をつけいられたと思いますけれども。まあそういう状態の中でカトリックの人が捕まりました。

つまり日系人というのはそういう形で非常に無責任に導入されたんです

ね。

そしてそのために結局非常に苦しんでいくという状態です。しかしバブル崩壊後も人数は減りません。

頑張っています。とにかく一週間に一日でも二日でも食いつなげる限りは食いつないで頑張っています。で家族を呼び寄せて、ですからその後減らずに、今だいたい26万人前後です。

この部分で非常に激しい文化摩擦が起こっています。

参考書に挙げておきましたつい最近出た西野留美子さん、この人は従軍慰安婦問題でずいぶん頑張ってやってきた女性のジャーナリストですが、この人が最近『エルクラノは何故殺されたのか』（明石書店）という本を出されました。

これは小牧市でエルクラノ君という中学生のペルー人の少年が日本人の、一口で言えば暴走族なんですけれども、青少年グループに袋叩きにされて殴り殺されたんですね。虐殺されました。

一人の人がそうやって虐殺されるという、その背景には、実は突然ワーストという風になったのではなくて、その前から地元はずーっと外国人が増えてどうのこうのという、そういう摩擦があつてですね、それがそういう形で噴出しているという事です。

これは日本の将来を暗示しているんでありまして、このまま行ったら日本中がそういう状態になるだろうと。これからどんどん外国人がまだ増えていく。景気が回復したとかどうとかって言いますけれども、そうなればそうなったで益々外国人は増えていくと。

将来日本では少子化傾向で二〇八〇年頃には人口が半分になるとか、しかも人口の若いところばかり減っていくわけですから上ばかり増えちゃう。だから社会が成り立っていかないわけですね。

どんなことをしたって外国から労働力に来てもらわなければやっていけない。

そうすると外国人がどんどん増えていくという状態はこれからも進んで行かざるを得ない。

その時に今までのやり方をしていると本当に文化摩擦、民族摩擦というのが殺し合いにまで発展していくという事があります。

◇国際結婚について

それからもう一つの問題、結婚の問題だけ触れておきます。
これはむしろ佐々木さんの方がご専門というか、いちばんケースを多く扱っていらっしゃるので全体の事だけ話しますが、国際結婚というのは大事なことです。
実はこのあいだの国会で入管法改悪が審議されたとき、これに反対するロビー活動でずいぶん頑張れたのですが、頑張れた一つの大きな理由は、外国人の配偶者、夫を持つ日本人の女性達が、ものすごく頑張ってくれました。
これは歴史上初めてだったと思いますが、私も少し作戦を考えて、「パートナーの国の衣裳を着て来て下さい、満艦飾できて下さい」とお願いしました。
民族衣裳の十数人がずらっとならんで国会の中をのし歩きますとね、これは目立ちますよ。
委員会の傍聴に入ったらですね、「うわーっ国際化した」という風に職員の方々が言ったそうですが、口で言うより視覚から感じてもらえた。
その女性達が何で怒ったかというとな家族を引き裂くような法の改悪をする事に対して、自分達が苦勞してきただけに許せない、という事で頑張ってくれたのです。

国際結婚があるということは二つの違った文化・民族が接するとき、一番そこで強く深くつながるわけで、これはすごく大事な事なんです。

その上で、あんまり件数が多すぎるのは問題だということですね。
図では15万8千人と推定しています。
どの位の件数ならば妥当かなんて統計上出るもんじゃないですけど、二つの現象がはっきり現れているということです。

その一つはですね、オーバーステイの上位4ヶ国、これが、昨年末の数字ですと一番が韓国ですね。そしてフィリピン、中国、タイという順序なんです。
それに対して結婚件数の上位4ヶ国が、順位はちょっと違いますが、中国、フィリピン、韓国、タイ、ちょっと中国と韓国が入れ替わるんですけども。
つまりオーバーステイの上位4ヶ国と結婚件数の上位四ヶ国がぴったり一致するんです。
実は去年まではそうじゃなかったんですよ。

結婚件数の上位4ヶ国の4番目にアメリカが入ってたんです。

私はいずれひっくり返ると言っていたんですけども、今年の統計を見ましたら数百人ですが、思ったよりも早くひっくり返った。だから上位4ヶ国が完全に一致するようになってきたのです。

これは何を意味するかというと、オーバーステイにならせるような圧力、その圧力が結婚の方にも働いてるということですね。つまり日本に働きたい、日本で働きたいと。

けれども働く在留資格がないから一方ではオーバーステイになっちゃって無理して働いてる。

そしてオーバーステイになっちゃってる人達が無条件で正規の在留資格が取れる道というのは結婚しかないんです。おかしいことはおかしいんです。でも実際にそれしかないんです。

時々相談を受けます。社長から「あんたよく働いているし会社にいてもらわないと困る人だからオーバーステイのままじゃ困る」と。「どんな証明書でもやるし協力するから何か正規の在留資格になる方法はないか。」と言われたと言って外国人の仲間が相談に来るわけですよ。

けれども私達は残念ながら「方法ありません。」と。

「どうしてもしょうがなかったら日本人と結婚しな。」なんて冗談で言ったりするんですけども、そのために結婚するわけにもいきませんから。ただ結婚だけは国際人権規約の家族の保護規定というのがあります、家族は保護されなきゃいけない。だから「入管法に違反しているから家族は別れて暮らさない。」とは絶対に言えないですから、結婚という場合には認められ「在留特別許可」というのが出るわけです。

それがあつたんですから、逆に言うとまさに在留資格を得るために多少無理でも、我慢して結婚しちゃうということが少なからずあつてこれだけの件数になるものと思われまふ。

それからもう一つは、最近の相談の中のケースがですね。

この間もちよつと集まつて話し合つた時に「最近は国際結婚の相談というのは減つたと。多くなつたのは国際離婚だ。」と女性シェルターの関係者が語つていました。

シェルターに逃げてくる女性も結局結婚したけど日本の男性が非常に悪質な、とかふさわしくない男性で、妻に対して暴力を振るう。あるいは一人のフィリピン人の女性と結婚して子供が出来ているのに、また別のフィリピン人の女性と今仲良くしている。

そういう事ですね、それで女性が逃げてくる、相談に来るといふケースが多くなつたんです。

これなんかですね、日系人のケースもそうですし、結婚のケースもそうで

すけれども実際に日本に働きに来なきゃならない人達がたくさんいるのに、それにふさわしい受け皿の制度が整っていないというか、整える気が毛頭ない。働きに来ちゃ困るという考え方だけで入管行政をやっているものですから、その辺のしわ寄せがこういう形でいろんな所に出ているということです。

◇合法就労について

では他の合法就労の人達はいいかというと、合法就労だって良くないんです。

一つだけ例をあげておきます。

「技術」というビザで呼ばれてきたフィリピン人の青年がいまして大学の建築科を卒業して建築技師の資格を持っている人です。大手のゼネコンの大会社が技術ビザで呼んでくれたから「ああ、きっと家の設計をしたり監督をしたりするんだろう」と喜んで日本に来ることにしたそうです。

向こうで最初に契約した時に1ヶ月25万円の給料。25万円以下だとビザが出ないんですね、これ最低賃金で。だから25万円の契約でビザをとる。

ビザが取れたとたんに会社の方からもう一枚この紙にサインしろと言って突きつけられたその書類というのは月給が6万円。仕方がないからそれにサインをして日本に来たということです。

実際に給料をもらった時は3万円くらいしか入らなかった。で、会社に話をしたらですね、凄いですよ。向こうで面接する時の、こちらから人が出張したりするそういう費用で何万円引いたとかね。

それから自転車を一台、中古自転車を買った、世話してもらったら、それで2万円引いたとかね。

そういう無茶苦茶なことで引いて。

それから部屋を借りてくれたんですけれども、そこは会社が借りたんであって、住んでいる間の家賃だけ払えと言うのはそれは仕方がないとしても、その権利金、敷金全部彼の給料から引いた。だからこれだけになっちゃったという話だったんです。

あんまり酷いから出かけて行って、こちらから丁寧に訪問して会社の前でハンドマイクで、「ご近所の皆さん、この会社は外国人技術者に対して給料払わないけしからん会社であります。」とやったら、けんもほろろで交渉もしなかった会社が飛び出してきて中に入ってくれというわけです。中で交渉しようとしてたら、警察呼びましたよ、向こうが。警察がいらっしゃいましたから「よくいらっしゃいました。」と。

「ここにいて下さっても良いですけども、これは民事ですから、労働争議ですからあなたが口を出したらあなたが違法ですよ。それでも良かったらいて下さい。」と言ったら帰っちゃいましたけれどもね。

そういう風なことで交渉して、まあようやく給料だけは取り返したということですが、

技術で呼んでもそんなもんです。ですから、どの在留資格も全部そういうしわ寄せがいつているという事ですね。

その辺で非常に酷い権利侵害が起こっているということでもあります。

◇教会の立場

最後にですね、少し飛ばしまして教会の立場について、すでにおわりのことが多いと思いますけれども、私を感じたことを整理してみたいと思います。

まず、日本のキリスト教会にとって最大の特色はカトリック教会の衝撃が大きいということです。

これは、カトリックの悪口を言うわけじゃないんですよ。これには一つの歴史的な必然性があるんです。というのは植民地にした時に、一番えげつなく改宗させたのがカトリックだから、フィリピンにしてもラテンアメリカにしても、85%90%もカトリックにさせっちゃったわけですよ。無理矢理に。

そういう地域からの出稼ぎが多いものですから、それでカトリック人口が多い。

特にフィリピン、それから中南米ですね。それだけ合わせただけでも三〜四〇万人のカトリック人口が日本に移ってきているということです。

私は、自分の日本キリスト教団と比較すると一番ぴんとくるんです。信徒数にして日本キリスト教団三つ分、それから礼拝出席数にすると五つ分くらいのカトリック人口がドカーンと来たわけですよ。

カトリック教会は日本キリスト教団に比べて大きいとはいえ、この衝撃は大きいですよ。

いん石がぶつかったなんてものじゃないですよ。向こうの方が大きいんですから。

ですからカトリック教会が取り組まざるを得なくなったのは当然のことです。

けれどもやっぱりカトリック教会は、取り組み出すと非常に組織も大きいんですし、やる事はちゃんとしていますから、それで、今全国で一番力のある取り組みをしているのはカトリック教会。

これはですね、もう社会問題だとか何とかじゃなしに、本当に「司牧」の問題、教会の牧会の問題としてやるざるを得ないという現実にも迫られて今やっているということですね。

ただやっている神父さんや信徒達に言わせると「いやそれもごく一部ですよ」と言われる。

確かに、他の所は動かないという現実があるようですが。

つまり、これはキリスト教自身が植民地にしたという結果として、当然受けなきゃいけない跳ね返りといえますか、責任が問われるということですね。

聖公会の東京教区がカパティランを設けていること背景には、一つにはやはり、フィリピンが、特に聖公会の領域で、聖公会の信徒のフィリピンの方がたくさん来ているという現実があるわけでしょう。日本キリスト教団は「UCCJ」ですけれどもUCCJ（フィリピン合同教会）の信徒というのは少ないので、直接教会に来られちゃって、やらざるを得ないということは少ないわけですけれども、しかし密度の多いところから出稼ぎに来ますと、どこかの教会に固まっていますから、そこではやらざるを得ない。

ですからキリスト教がかつて犯した、植民地にしていった、あるいは植民地にする働きと共犯関係を結んでいったということの結果として、キリスト教の歴史的責任が問われていくということですね。

これは我々の悔い改めの問題としてやらざるを得ない、信仰的にやらざるを得ないということが一面にあると思います。

◇聖書的根拠

それからもう一つ私は、自分が聖書学の方を中心にやってきたので、聖書的な根拠としてですね、あれこれあちこちにこういう聖句があるよという話じゃなくて、私の多少の聖書学的な研究の一つの結果として、復活後の教会の作りだした伝承じゃなくて、生前十字架にかかるまでのイエスの周辺、イエス運動とかイエス集団と言いますが、その周辺にまでさかのぼることが出来るような古い伝承ですね。その中に三つ、非常に重要な旅人に関わるものがあります。

これは挙げれば皆さんすぐにおわかりですから聖句だけ挙げておきます。

一つはルカの10章30～35節。

これは有名な良きサマリヤ人のたとえ話です。

エルサレムからエリコに下っていく旅人が途中で強盗に会うんです。まさにこれは旅人が強盗にあった話です。でその旅人の側を祭司とレビ人が通り過ぎて、そして当時の被差別者であるサマリヤ人が助けてあげたということです。

これはね、寿では明々白々でして、あそこで困っていたフィリピン人を、周辺の教会はほとんど見過ごしにしている、助けなかった。彼等の面倒を見始めたのは、日雇い労働運動の人達であり、そして在日朝鮮人の方々が多かったんですけど、日本社会で被差別状況に置かれた人達です。

つまりあの話というのはですね、これは既成の宗教に対して非常に厳しい批判のたとえ話だと思います。隣人「である」か、隣人「になる」かという神学論は元の伝承じゃないと思います。

それからもう一つはルカの11章5～8節ですが、これは夜中に旅人の友達が転がり込んできて食べさせる物がないので、近所の家に行ってパンを借りてきたという話です。

これは私は大好きでして、この聖句に支えられて、今まで十年頑張ってきたと言えるくらいに切実な話です。

旅人に転がり込まれて、自分の力じゃどうにもならないと、しょうがないから、隣の家をたたき起こして、何とかしてよという風に助けてもらう。今私達がやっている運動というのはまさにそれですね。

本当にそうです。なかなか起きてくれないですけども。まあそういう事です。

ルカのテキストでは前後お祈りの話になっちゃってますから。

お祈りの話として読んでも良いですけれども、お祈りをする前にもうちょっと体を動かして、隣のドアを蹴破って置いてから、お祈りした方が良いでしょう。

そういう、もとの話は独立の話で、お祈りとは直接関係ないセッティングで語られている話だと思います。

それからマタイ 25 章 31～46 節、これは山羊と羊を分ける話で、もっとも小さい者の一人と言ったときに、獄にいたときや、病に悩んでいたときとかということの中と並んで、「旅をしていたとき」ということ、旅人であったということが示されています。旅人というのはキリストが我々の前に現れる、その姿である。まさにそれが、現代の日本で起こっているということです。

そういう聖書の非常に重要な箇所で、旅人を助ける話というのは非常に大事な事として出てくる、私どもの信仰の大事な事柄として出てくるのではないかと思います。

◇クリスチャンの役割

それから最後にもう少し積極的な面ですね、全国のこの運動、連絡のとれている団体が、100近くありますけれども、そのどのグループをとってみても、よく聞いたらね、メンバーの多くがクリスチャンだったと。カトリックの信者だった場合もありますし、教団だった場合もあります。どの団体でも一人や二人はクリスチャンが中心になって働いています。この界限でカパティランとかカトリックの組織は、それは当然として、千葉のハンドインハンド、それから埼玉の119。

横浜のカラバオの会でも10年経った今頃になって「えーあんたもカトリックだったの」と驚いたり。プロテスタントも含め中心メンバーの半分くらいがキリスト教関係者です。そんなこと普段何にも言わないで、お互い知らずに、まあ私は牧師の看板あげてますからみんな知ってるんですけども、下手に牧師がいるもんだから「私クリスチャン」なんて言わないで、みんな黙ってやってたなんて事があったりですね。

全国の移住労働者支援運動の中で、クリスチャンが良い役割を果たしているのではないだろうか。これは教会が持って来た大事な伝統でキリスト教は元々国境を超えた運動ですから大事な伝統で、とりわけ今、国際化していく社会の中で、世界を良い方向に持って行くために、教会が使わなくてはならない大事な遺産ではないかと考えています。

そういうことで私は移住労働者の支援の領域というのは、これからの教会にとって非常に大切な「証し」と、奉仕の領域になると自分では信仰的にとらえているわけでありませう。

◇質疑応答

司会者

大変少ない参加者にもかかわらず、熱心にお話頂き有り難うございました。

最初の日本社会の差別構造というようなお話がありましたが、それは部落差別から始まってアイヌ人差別、琉球差別、在日韓国・朝鮮人差別、そしてその上に移住外国人の差別がある、というお話に非常に、私も目が開かされるような気がいたしました。

そしてその重層的にある差別の層の中に、また縦軸として女性差別と障害者差別があると、こういうお話で、東京教区が現在取り組んでいる宣教方針というか、最も小さい者に対する取り組みという、東京教区の姿勢にも、今のお話は有益なお話であったと思います。

これだけの人数ですから、ざっくばらんに、質問やご意見やら自由にお話頂きたいと思います。

質問

昨日の新聞に中国から帰国された家族の話が載っていました。中国残留孤児ですか、そういう方々が帰ってきて、言葉が通じないということで、向こうで暮らしてこられた方は、あちらの生活に慣れて、違和感があって近所づきあいも上手くいかないということですが。

答え

つまり血統主義、血のつながりから言えば日本人かも知れないが、小さい時から向こうで育って来て、文化的には向こうの人なんですね。ですから、そういう人達を日本に迎えるという時に、違った文化を持つ人達を迎えるのだという、用意がこちらになくてはいけない。

全然何も知らない所へポンと来たらね「何て常識がないんでしょうか」ということになる。

常識というのはこちらの文化の問題であって、向こうには向こうの常識がある訳で、こちらの受入態勢がよっぽど出来ていないと、摩擦が起こるのは当たり前なんですよ。

それと同じ事が起こっているのがベトナム難民です。

今日ちょっとお話が出来なかったのですが、このあいだの国会の中で、普段手に入らない資料を色々取り寄せることが出来てわかったことなんですけれど、外国人の犯罪が多いというが、多くないんです。

日本人に比べて遙かに少ないんです、パーセンテージは。けれども件数が増えた増えたと宣伝しているんです。確かに件数は増えてきているんですけど、増えている件数の中で、全体で2万件位の中で、5千件～7千件といえれば凄い件数でしょう。

それだけの件数を占めているのはベトナム定住難民なんですよ。

せいぜい2、3百人の人が、オートバイを集団的に盗んで密輸出したということで、件数がドーンと増えてしまうんです。それがなければ外国人の犯罪は減っているんです。ベトナムの人がどうしてそんな犯罪を犯すのか。これは難民の受入態勢が全く出来ていないから。

全く出来ていないと言うと政府は「いえいえ、今まで定住センターを設けて」と言うでしょうが、昨年か一昨年、大和の定住センターが閉鎖されたんですよ。

地元の人達や、難民を支援してきた人達は「ここは命綱なんだから、なくなったら困る」と訴えたんですけどだめだった。

半年ぐらい定住センターに住んで、多少日本語を教わって、ぽーんと放り出されたって、日本社会に馴染めません。だから、「定住センターにまた来て、そこの人達が相談員のような役割をして相談相手になってきたのがなくなってしまうたら、本当に命綱が切れてしまうようなものだから」、と言ったんですけど外務省はやめてしまった。

違った文化の人が来るということに対して、こちら側としてはそれなりの受入態勢を何年もかけて準備して、言葉の問題もあるでしょう、社会に入っていく場合でも、相談員がいていつでも相談できる態勢にするとか、近所の人達とのつながりというものをどう結んでいくのか、それは地域ぐるみの課題でしょう、市町村の。そういうところの手だてが何もなしに、本人達の責任であるとしてぽーんと放り出されてしまうのでは問題が起こるのです。

中国からの、いわゆる「残留孤児」の家族呼び寄せの問題は、ベトナム難民の場合と非常に良く似ていると思います。違った文化の人達を受け入れるのですから、それはそれなりにこちらもちゃんとした準備とフォローをしなければなりません。それがないために、悲劇が起こってくる。

ただ、こういうことは言えるんです。中国から日本に来たいという希望が非常に強い。

それは中国が、今の近代化と言われる政策の中で貧富の差が開いてきて、喰えない人達が一杯出て来てしまっって、他の第三世界で起こっているのと同じ事が中国で起こって来ている。

そういう事の中で日本に来たいという願望が非常に強い。

中国は自国民をなかなか外に出さないものですから、特に中国からの「密航」が多いというのは国から出さないから「密航」で来るんですね。国が出せば飛行機で来ますよ。

あんな命がけのやり方で来なくても良い訳ですね。

来る方法が非常に少ないんで、留学生になって来るか、あるいは日本人とのつながりがあれば、そのつてによって日本に行こうということが強い訳ですね。

ですから中国残留日系人の問題は、日本に帰ってくる権利があるんですから、そういう人達をちゃんと迎え入れる準備をする義務・責任がこちらにあると思います。

その点がないことが、今のような悲劇を生んでいくと、これを見ながら思います。

質問

中国の留学生の保証人になるためには、年収750万円ないと駄目だと言われますが。

答え

それは理由ははっきりしていると思います。

それが良いという訳ではないのですが、韓国の場合は観光ビザで出られますから。

観光ビザで来て、オーバーステイで潜ってしまうということが出来るんですが、中国の場合は、多分、今でもまだ地方によってばらつきは色々あるようですが、観光目的で国から出るパスポートそのものが取れない。

だから学生というルートしか、普通の人にはまともに来るルートがない。

働きに来たい人も学生ビザしかないということがあって、中国からの留学生については厳しいんだと。

今でも多分留学生の総数の半分以上が、中国からの留学生です。

中国の人達だけがそんなに勉強が好きだということとは違うと思います。

もちろん勉強が好きの人が来ているとは思いますが、一つには、観光目的では出られないから留学生としての資格で来るしかないという原因がありますね。

一時就学生と言われた日本語学校の人達、これは違法の暴力団絡みのような、悪質な日本語学校を作って、実際には働かせて、派遣業をやっている、日本語学校というような形を作っていたということは90年頃迄ありました

が、それはあまりにも酷いので、法務省が取り締まりを厳しくしましたけれど、今でもその流れでもって中国からの留学生が一番多いようですね。

質問

中国からの帰国者に対する支援のグループがあるが、暴力団が受け皿というのが一番やさしいようで、居心地が良くなってしま
う、支援者グループで話し合いをしたが、何処が彼らの受け皿になるのかという問題については如何でしょうか。

答え

一番端的には外国人の子供が学校に行った時に、日本語を特別に教えるということを行行政の責任としてやってませんでしょう。一部の先生方が自分達の努力で頑張ってやっておられます。

それから、自分達の母国語を学習する機会が全くありません。

自分の文化を、文化というのはアイデンティティーの土台ですから。

それがちゃんと自分の中になかったら、子供達は自分を大事に思えない訳だから、ちょっと親切にしてくれる人があれば、暴力団へでも何へでも行ってしま
う。

これは、在日韓国人・朝鮮人の子供達でも同じ事ですね。

日本は自分たちと異なった文化、言葉というものを大事にするシステムがない国ですから。

うちの教会員の話では、イギリスに行って、「学校に入ります」と言っ
たとたん、すぐに言葉を学習するクラスに受け入れてくれる、クラスの皆が色
んな国から来た人を受け入れる体制が、もう学校の中に出来ているとい
うことを話していましたけれど、それが今の日本には全然ない。

質問

先生のいらっしゃる寿町の人達は教会へ行きますか？

答え

ポチポチ、ただ、まあ、何をやっているのか覗きに來るとい
う感じ。

もう一つは昼ご飯を食べに來る。

うちは、「來れば食べさせますよ」というやり方はしていないの
ですけど、礼拝を一緒にやったあとで、「じゃあ一緒に食べましょ
う」ということで、何人か見えています。

定着して教会のメンバーになった人が二人程いますけれど。

質問

行政は何かをしていますか？

答え

はい、生活館があって、市の相談センターがあります。長年のせめぎ合いの中で、市の施策を引っ張り込んで来てやらせているというところが多いんですけど、市もそこには特別予算を使ってはいるんですね。ただ、今はもう人口の3分の2が生活保護の受給者になりましたから。3分の2より4分の3に近いのかな。

質問

外国人労働者の話をする時に、いわゆる3Kといわれている労働に日本人が就かないものだから、そういう事をやらせておいて、だけどバブルがはじけ、景気が悪くなっちゃって日本人の雇用が危ないという時に外国人が働いて、しかも「不法」ではけしからんというような話があって、労働運動と、いわゆる「外国人労働者の人権」とは何処かで対立していくのだという言い方があるわけなんですけれど、例えば日雇いの労働運動をやっている人達の考えの中では、外国人労働者というのは？

答え

私は、その意味での日雇い労働運動をやってきた人の思想性というものに非常に敬意を持つんです。つまり、自分達がどういうやり方をされてきたかという通常労働者から差別されて来たんですよ、日雇労働者は。

一番酷かったのは、港湾の労働の中で、港湾労働っていうのは船が入れば仕事があるけれど、入らなかつたら仕事がない訳ですから、日雇労働者しか使えない訳です。

それで、港湾労働者として青手帳をもらって登録している人達は、船が入ると優先的に雇用されるという形になっていたんですが、その人達が労働組合を作ったんです。

ところが、手配師の方は手帳を持っていない労働者の方が安く使えるものだから、そっちに仕事を回してしまうことがよくある。

そうすると手帳を持っている労働者の人達が、「あの人達を排除せよ」ということになり、その部分に外国人が入っていたものだから、港湾労働者の組合が、会社に対して、「外国人を雇うな」という申し入れをしたという構造が確かにあるんですよ。

ところがね、そういう形で外国人を排除して、むしろ「あの人達に手帳を持たせろ、俺達の仲間にさせろ」という風にもって行くのではなく、「あの人達を排除しろ」と言った結果、何が起こって来るかということ、自分達は段々年を取ってしまいます。組合が段々小さくなってしまふ。力を持たなくなってしまう。会社と喧嘩できなくなってしまう。

労働運動というのは権利を奪われている部分を抱え込んで、その人達の問題を抱えてやりながら大きくなって行くものだと思いますね。皆がそうは行かないでしょうが、神奈川シティユニオンという組合があるんですが、あそこは非常に激しい闘いをやって、おそらく年間何百件という相談を解決して、組合運動としても前進しています。

外国人の問題を受け止めてそれを解決して行く。労働組合はそれを通して収入も得られますから。

そういう形で、むしろ労働運動として広がった。日本の労働運動が今やジリ貧で、ばんすかりストラやられたって喧嘩も出来ないということになって来たのは、今までそういったやり方をして来なかったからですよ。

もう一つは、今の話で、じゃあ、失業率が高くなったから、日本人が三K労働に行くかということと行かないですね。

フリーターとか言って他のこと何かやっている。

つまり、日本の産業界というのは「仕事がない、ない」と言っているんですけど、おそらく、三K職場の日雇労働の仕事がものすごく少ないことも確かなんですけども、一番なくなってくる部分というのは上の方の部分ではないですかね。

たしかに日雇労働者の今の状態は、外国人に対して冷たい、私なんかに対しては、風当たりが強い、俺達の職場が外国人に取られてるとか考えやすい。一番弱い部分がそこでせめぎ合う訳でしょう。

組合運動は、そのこのところを越えなくてはならない。

少なくとも表立っては「外国人排撃」ということは言えないという押さえ方ですね。

そういう事はいけないんだという雰囲気、寿には一応あります。

これは日雇い労働運動に負うところが大きいと思います。

質問

教会としてこういう問題についてどう考えたら良いのでしょうか。

日本語学校はこれからどんどん増えると思いますが、外国人が増

えると言うことは、日本語に対する需要は増えて行くでしょうね。

日本語学校が増えることが良いか悪いか？

答え

日本語学校自体は必要があつて増えるんですから、良いも悪いもないと思うんです。

カラバオの会でも、日本語教室をやっていて、よい交流のきっかけになっています。

教会が一番出来るし、やらなくてはならない立場でしょうね。

ただ、相談を受けて動ける態勢が伴って行かないと、日本語を教えるだけでは上滑りしてしまうと思います。

質問

教会はそういう事に動いてこなかったんですか？

答え

そうですね、私は両方の立場ですから、教会の立場でもあり、教会に対して批判的な立場でもあります。

半分ははみ出したところでやっていますから、両面あるんですが。

一面から言うと教会は本当にしょうがない。どうしようもない。

神経が麻痺しているんじゃないか。

目の前でこれだけの人の苦しみがあるのに、自分の目の前で苦しんでいるのに。

「難民・移住労働者問題キリスト教連絡会」という組織が今、NCC（日本キリスト教協議会）の中に事務所を置かせていただいているんですけど、そのパンフレットに面白い漫画が描かれています。

教会の門の中で牧師が「うちには外国人が来ないしね」と言っているんですけど、その門前で子供を抱えて外国人の女性が「誰か助けて」と言っているんですね。

門の外と中が全然かけ離れてしまっているんですね。

質問

部落差別のような問題のそもそもの原因は何処にあるのでしょうか。

答え

たとえばアメリカの場合は、白人が行って植民地にしたところですから、先住民、誤って「インディアン」と呼ばれた人達に対する差別が非常に強くある訳ですね。

その後、黒人を奴隷として輸入して、奴隷が解放されてそのまま残っているという形で黒人差別がありますね。

日本の部落差別のようなカースト差別の本家本元はインドですね。インド・朝鮮・日本・ネパールなんかにあるそうです。

しかし中国にはないそうです。

フィリピンにも、地方差別はあるけれどもカースト制差別はない。何故かについては専門家には色々な説があるんですが、私は中国はしょっちゅう政権が交代して誰かが、永久にがっちり支配して来たということがないから、その都度、支配階級がひっくり返るから、昨日の王様が今日は旅人になってしまうので、そういうことは起こってこなかったのだと思います。

フィリピンの場合、差別はスペインの植民地化から始まったとも言われます。

これに対して、インドや日本、朝鮮の場合には、侵略して入って来た少数の支配者が固定してがっちり支配することがずっと続いていますから、それが支配者を「貴種」として、その対極に「賤民」を固定化するカースト化につながって行くのではと私は理解しています。

質問

教会は日本語しか看板が書いていない。

例えば「聖餐式は何時から何時まで」とか、英語で書いていない。

まして韓国語で書いていない。

外国人の人が、聖公会の教会に来るなんて想定していない。

教会の看板に端的に現れる内向きには、こういう問題がと掲示してあっても外に貼っていない、教会がこういうことをやっていますなんてはつきり言わないんです。

看板、掲示板を外向きに変えていくというところからしていかないと、それで実際に人が来た時にどうするか？日雇労働者の人が来てもどう対応して良いかわからない、あるいは外国人の人が礼拝に来たら、さあどうしたら良いのかわからない。

用意が全然出来ていないからそれが一番コンプレックスになっています。

まして、外国語でなんて発想もしないんです。

まして、一緒に礼拝するなんて事がなかなか生まれてこない。

悪循環もいいところですよね。

答え

私なんかの場合は、結局、普通の教会で普通にやっていたのでは、こういう働きが出来ないですね。

今は非常に自由なものですから、二五年間、普通の教会の牧師、住宅地の牧師をして来て、私としては、もう、一生これではかなわないと思って、飛び出したという経過はあるんです。

そういうところに縛られている先生方に対して申し訳ないんですが、「教会というのは牧師がハリツケにされる十字架だ」と、「貼り付け」ですよ、動けないんですから。

せめて週のうち二～三日ぐらいは、本当にしたいことが出来る時間が欲しいのです。

一週間びっしり集会で貼り付けにされて来たんですが、今は、それから解放されてやってみて初めて、教会の外に出てしまわないと出来ないようなことができています。

教会の中に問題が入って来るということはまずない。

看板を英語で書いても英語を話す人が入って来るということはまずない。

私のところも寿町の中にありながら、日本語の看板しか出してないんです。まだ英語の看板も出してないんです。

今、メンバーに韓国人が一人おられますが、この人は日本語がペラペラです。

時々英語を喋る人が来たりして、同時通訳が出来るようにしていますが、教会の中に入って来るということは非常に少なく、やはり市民団体としての相談活動。

相談活動を始めると、ケースが入って来る。

一つケースが入ると皆で忙しくなるというふうにして、つながりが結ばれるのです。

そこから始まって行って、私の場合は、たまたま「カラバオの会」が全国で一番古い、名前が良く知られた組織だったもので「カラバオの会」が呼びかけて、「もうちょっとお互いに、各地域で連絡を取り合いましょう」ということでネットワークを始めて、関東でまとまって、それが全国に広がって行くという形で、今、全国ネットワークになったんですね。

今、私は、ほとんど自分では相談活動、ケースというのが出来なくて、地元の団体では、定期的な会議に出て報告を聞くだけという状態。

実際には昨日も国会に行って議員秘書に会ってロビーイング活動をしてきました。

板橋のAPFSという団体の外国人二人が、オーバーステイのまま子供達が大きくなる。

四才で日本にきて今六年生と言うように。

「このままでは将来どうにもならない、何とかして欲しい」ということで、とうとう名乗り出て、法務大臣に在留特別許可を申請しました。

これはまかり間違えば退去強制になります。

本当に国に帰って路頭に迷うか、政治的迫害を受けるか、生活出来なくなることを覚悟で立ち上がった。

四の五の言っていないで支援するっきゃないですよ。

教会に座って、来ないかなーとは言っていないのです。

司会者質問

先生のお働きは大変、重要なものだと思います。

尊敬する働きだと思いますが、先程、色々な方がおっしゃっていましたが、「教会との関係」というか、そのことで、今の教会が半ば麻痺しているのではないかというお話があったのですが、私も共感するところがありまして、たまたま私が今いる教会の近くで、スリランカから来た労働者が一緒に下宿しているところがあり、その中から二人程礼拝に来て、一人がカトリックの信者で、そういうことで段々とつながりが出来まして、うちの教会の信徒で日本語を教える信徒が、日本語学校の先生をしている人ですが、「日本語を教えましょう。教会のホールを貸してくれたら、日本語教室を始めましょう。」ということになったのですが、教会委員会で話し合った時に、それに対して「それは良いことだからやりましょう」という積極的な意見があまり出ない。

それは一つには、私のいる教会のある地域で、外国人の窃盗事件のようなことが起こったことがあるらしいので、それで地域の人達が警戒しましてね、「こういうことがあったから気をつけた方が良い」と、そういう形で「日本語教室をやらない方が教会としては安全なのではないか」と、こういう話し合いになった訳なんです。

実際には日本語教室は、始まったんですが、その人達が地方に行ったので、半年ぐらいで終わってしまったんですけど。

私は牧師ですから信徒を批判してはいけないと思いますが、大半の、今教会に来ている信徒というのは、部落差別もアイ

又人差別、琉球差別も全く関係ないというか、自分の救いのことだけに興味を持っているという人がほとんどだと思います。

そういう信徒を、牧会しなくてはならない。
縛られていくというのはその通りだと思うのですが、そういう教会の中でやっている牧師として、教会が開かれて行く、そういう問題に関心を持って行くような牧会、司牧というか今の牧師は悪戦苦闘してやっている方が沢山いらっしゃると思うんですけど。

渡辺先生の働きは素晴らしいと思いますが、一方では、教会に縛り付けられながら信徒と悪戦苦闘している牧師の働きはどう考えたら良いでしょうか。

答え

私はいつも自分は「特権階級です」と言っています。
私みたいに思う存分、時間が自由に使える立場の牧師は本当にまれだと思います。
しかも、牧師だからこういう事が出来るんで、信徒なら出来ないと思います。

私の場合、経済的なことを言いますと、教会は小さいですから、教会の信徒で予算の半分しかカバーできない。後は、募金である訳です。

私はこれを「托鉢」と称しているのですが、昔の托鉢は、お鉢を持って一軒一軒まわって大変なのですが、今は、郵便振替口座を作って用紙をまいて行くということですから。
それでも予算の半分ぐらいは毎年、何とか満たされている。
それでわりと自由な時間が頂けているということで、非常に恵まれた立場ですから。

逆に、私はそれだから「出来るだけ飛んでみましょう」と、何処まで飛べるかですね。
そういう立場の者を、そうでない、教会を持っておられる先生方と、何処で、どんな形でつながって行って、お互いに協力しあえるのか、と考えて行ったら良いのではないのでしょうか。

ですからずるいんですけど、私のところは、神学生が何人か卒業しているんですけど、卒業する時に私が言うことは、「僕がこの伝道所でやっているような説教を普通の教会に行ってやってら駄目だよ」。
「ちゃんと信徒の顔を見てやりなさいよ」というようなことを言って送り出しているということもあります。

教会の現実の状況から、色々な段階があるんだと思うんですね。
ある程度、牧師が社会的活動をするのをバックアップできるところまで、
信徒が進んでいる教会もあるでしょうし、全く駄目なところもあるかも知れ
ませんね。
そのところは、どのような段階で、お互いに情報を伝え合って協力して行け
るのかというところが、色々な工夫があるのではないかと思いますけれ
どね。

「今を生きる」を聞いて

日韓交流プロジェクト 司祭 長谷川 正昭

渡辺英俊先生のスピーディで歯切れの良い語り口と端正な風貌にまず魅せられました。

語られた内容がまた実に蒙を啓く話で日本社会の差別的な構造と実態が次々に明らかにされていきました。

部落差別、アイヌ人差別、琉球差別、在日韓国・朝鮮人差別という幾つもの層を重ね、その一番表層の部分に移住外国人労働者の差別があり、しかも重層的な横の層を貫くように縦軸として女性差別と障害者差別があると指摘されました。

つまり、女性と障害者は何処の層でも、差別を受けているわけです。

渡辺先生のお話は単なるイデオロギー的な説教ではなく、横浜寿町という寄せ場で長年、フィリピン労働者のケアを献身的に取り組んでこられただけに説得力があり、生々しいリアリティを感じさせます。

カトリック横浜教区は「滞日外国人と連帯する会」を組織し、フィリピンデスク、ラテンデスク、韓国デスクとそれぞれ専従者を置いて、教区をあげて取り組んでいます。この働きの火つけ役になったのも渡辺先生の「カラバオ（水牛）の会」であったということです。

じつは昨年、大韓聖公会ソウル教区の南揚州教会の李貞浩（イ・ジョンホ）神父と信徒の李充在（イ・ユンジェ）氏を日韓交流プロジェクトで招待し、フィリピンデスクを訪問する時に小職も同行しました。

（南揚州教会もフィリピン労働者のケアに取り組んでいる教会です。）
フィリピンデスク訪問の後、横浜寿町に行き、「カラバオの会」の渡辺先生に始めてお目にかかったのです。

このような働きに本気で取り組み、牧師の務めのすべてを捧げている聖職者がいるということにショックを受けました。

しかも、渡辺先生は北海道と横浜で長年、教会の牧会に携わって来られた方です。

この日の講演の中でも教会の仕事をしていると、どうしても縛られて自分のやりたいことが出来ないのでは教会から離れたと言われました。

そして、「良きサマリヤ人の譬え話」を引用され、強盗に襲われて倒れている旅人の向こう側を通り過ぎて行った祭司とレビ人に私達がならないようにと警告されたのです。

教会制度の中にどっぷりとつかっている自分の姿を省み、大いに反省させられたような次第です。

渡辺先生が給料未払いの会社を訪問し、ハンドマイクで近隣の人々に訴えろと会社の幹部が慌てて外に飛び出して来た話、そして駆けつけた警官に賃金未払いは労働基準法違反で労働省の管轄だから警察は出る幕ではないと言うと警官がすすすごと引き揚げて行った話は実に痛快です。

「寄留の外国人を虐げてはならない」と「旅人をねんごろにもてなす」ことは聖書の教えでもあるのですが、このすぐれて現代的な課題に体当たりで取り組んでおられる渡辺先生のお働きはどんなに敬意を払ってもまだ足りないと思います。

この問題は近い将来もっと大きな課題として教会全体が取り組みを迫られるように必ずなるような気がしてなりません。

わが東京教区には「カパティラン」という先進的なプロジェクトがありますが、ニューカマーと呼ばれる韓国人、中国人労働者が急増している現在、日韓在日プロジェクトと日韓交流プロジェクトが問題の所在を明らかにするために共催のかたちで今回のような講演会を催したわけです。

お話の内容からもわかるように日本社会の「今」が鋭く抉られている啓発的な講演なのでプロジェクトのメンバーだけのものにしておくのは勿体ないと思い、広く東京教区の皆様にわかち合って頂きたいと願う次第です。

回心のよびかけ

日韓在日プロジェクト 執事 香山 洋人

渡辺牧師の講演をうかがい、外国人労働者の人権問題が日本の近代化の過程の歪みの現われであることがあらためて分かりました。

かつての軍事的アジア侵略の延長線の問題として、日本経済を支えるために周辺国、アジア地域の人々が犠牲になるという構造がいまだに続いているということです。

ここで問題なのは、日本経済、日本社会というおおざっぱな言葉が示す実態は、実は私たちの日常生活そのものであるということではないでしょうか。

私たちの豊かさ、安定した生活、これらは最近揺らいできたとは言うものの、それでも日々の暮らしに事欠かない者にとっては、アジアの貧しさと引き換えに保たれているという悪の構造があるのです。

しかも、このことは建設やその他様々な産業の中でも見出し得る外国人労働者の存在を通じて、目に見える形で突きつけられた問題です。

渡辺牧師は、こうした課題と取り組むことを、労働者の街、横浜寿町において実践しており、日々の小さな実践と共に、全国の運動体の組織化や国会へのロビーイング、さらには国際連帯運動など、あらゆる次元での活動を熱心に展開しておられるのが印象的でした。

このことは、外国人労働者問題が、ローカルな問題であると共に、社会全体、政治や国際関係も含めたグローバルな課題であることのゆえでしょう。

こうした問題であるからこそ、外国人労働者問題においては、地域的でありつつ、世界的であるキリスト教会の特性が活かされるのだというメッセージは大きな励ましでもあり、希望でもありました。

もちろん、それはかつての欧米諸国の植民地拡張競争に便乗し「世界宣教」と称して、植民地的主義な教会拡大政策をとっていた教会自体の悔い改めの業でもあります。

人権侵害の事実は、神の似姿が歪められていること、キリストの愛が傷つけられていることであり、同時に傷ついた隣人の脇を通りすぎる者たちへの回心の呼びかけでもあります。

私たち日本聖公会が、これまで諸外国の教会との間に築きあげてきた交流の輪を、このような宣教のためのネットワークとして捉え直すことが必要でしょうし、既に始まっている様々な活動が今後とも広く展開されることが望まれています。

◇渡辺 英俊 先生 プロフィール



現住所	〒232-0021 横浜市南区真金町2-13-401
電話	045-262-4599
<hr/>	
1933年	山梨県に生まれる
1961年	東京神学大学同大学院修士課程修了（神学修士）
1961年～1971年	日本基督教団岩見沢教会牧師
1971年～1986年	日本基督教団横浜磯子教会牧師
1987年～現在	日本基督教団なか伝道所牧師
1997年～現在	東京女子大学非常勤講師兼任（キリスト教学担当）
1992年～現在	日本キリスト教協議会国際関係委員 同フィリピン小委員長
1994年～現在	社団法人神奈川人権センター副理事長
1997年～現在	移住労働者と連帯する全国ネットワーク共同代表 同事務局長を兼任

訳書	アラン・リチャードソン「新約聖書神学概論」 （共訳） （日本基督教団出版局1967年） エルンスト・ケーゼマン「新約神学の起源」 （日本基督教団出版局1973年）
----	---

著書	「聖書の間人達」 （日本基督教団出版局1976年） 「愛への解放」 （新教出版社1980年） 「現代の宣教と聖書解釈」 （新教出版社1986年） 「解放の神学をたずねて」 （新教出版社1988年） 「片隅が天である」 （新教出版社1995年）
----	--
